

東海大学 健康学部 教育研究レポート

2019

第Ⅰ部

特集 学部開設1周年記念シンポジウム報告
～健康フロンティアへの挑戦 学部開設から1周年を迎えて～

第Ⅱ部

2018年度
健康学部研究教育補助金報告書

第Ⅲ部

学生の授業アンケートから選んだ 健康学部の
“いい授業”

第Ⅰ部

特集 学部開設1周年記念シンポジウム報告
～健康フロンティアへの挑戦
学部開設から1周年を迎えて～

【日時】2019年5月30日(木) 16:30～18:30

【会場】東海大学高輪キャンパス

健康学部の1年の軌跡

堀 真奈美

小林 理

石井直明

パネルディスカッション

20代に求めるキャリア形成 —『健康な社会』の実現を目指して

有賀誠司

阿部正昭

●健康学部の1年の軌跡



堀 真奈美

(健康マネジメント学科教授・学部長)

学部一周年記念シンポジウムの趣旨、軌跡から奇跡へ

① 1周年を迎えて

健康学部は、「健康な社会」の実現に必要な総合的かつ専門性の高い人材を養成すべく2018年4月に開設しました。1期生に加え、2期生が2019年4月には入学し、5月には元号も平成から令和になりました。

健康学部は当初の構想通りに進んでいるのか、入学した1期生には「未来の幸せ」をつくるというメッセージが伝わっているのか。変化の激しい環境の中、「走りながら考える」状態であるからこそ、これまでの歩みを立ち止まって確認するとともに、これからの健康学部がどこに向かっていくのかを改めて一緒に考える必要があるのではないか。以上の想いより、シンポジウムは、1周年という節目を記念すると同時に、これまでの学部の軌跡をたどり、これからの未来を考える契機とすべく開催しました。

② 学部開設は「奇跡」

今となると、健康学部があるのは当然、当たり前と思われるかもしれませんが、健康学部の開設までの道のりは決して平坦なものではありませんでした。「本当に新しい学部ができるのか？」と思われた人が少なくないと思います。

私自身は、2015年夏頃から新設学部の設置構想の策定に関わることになりました。しかし、アイデアはあっても、「ヒト・モノ・カネ」何もかもないという状態。しかも、学部開設まで2年半で、時間もない。まさに「ないない尽くし」の連続。

2015年12月クリスマスの日には第1回設置準備委員会がスタート。2016年2月に設置準備事務局メンバーが増え、具体的な形に落とし込む作業が加速化しました。2016年度になると、文部科学省への書類提出、審査通過。教職員人事、学部拠点となる5号館の改修計画、広報戦略の策定など、次から次へという感じで新しいことが始まりました。2017年度からは学生募集も本格化。しかし、開設半年前までは、湘南キャンパスには教員がほとんどいない状態で、入試、広報、施設関係、教務関係すべてを実施しなければなりません。高等教育室が設置準備を兼ねるといっても異例中の異例。

今でもふとした時に思い出しますが、大学執行部、学部設置準備メンバーとは、時に大激論を繰り返しました。正直、無謀とも思える条件の中で最適解が見つからない中、何度も投げ出したい気持ちになりました。それでもやり遂げようと思ったのは、何かを成し遂げようという志の高いメンバーに恵まれたことと、健康な未来の社会に貢献する人材養成をする学部が必要であるという想いが本物であったからです。前向きな未来のため、希望のためと信じ、「Project Hope」と名前をつけて活動をしました。他キャンパスで会う機会の少ない教職員と一緒に協働できる契機と考え、開設前年度にはキックオフシンポジウムを企画。また、学部開設には多くの外部の有識者のアドバイスをいただいたこともあり、外部の方に学部の存在を知っていただくということも目的でした。

以上の理由から、開設前年度には、霞が関校友会館にて、キックオフシンポジウムを4回開催しました。全てに共通するメッセージは、健康な社会をキーワードに、人と人がつながり、人と組織、社会がつながり、そして、学問も



つながる、という未来型のネットワークの構築です。それは、従来型の縦割りではなく、問題解決に向け、複数領域の知識・技能をつなげ、マネジメントすることを意味します。縦軸と横軸を「つなぐ」ことが重要なキーワードとなっています。

実は、健康学部のロゴマークは、このことを象徴した形となっています。専門領域を意味する単独のハートが、東海大学の校章旗にもある、クロスでつながることで、H(健康)の形になっています。つながらなければHにはならずバラバラになってしまう。それぞれの専門が埋没することなく極めると同時に、総合的につながる。これができるかによって、健康学部の真価が試されることになると考えます。そして、これこそが、健康学部の今も続く挑戦ですが、進捗状況はどうか？節目ごとに振り返る必要があるのでは？それが、1周年シンポジウム開催につながりました。

③ 変化の連続、新しい「奇跡」の始まり

2018年4月、築40年の5号館を改修し、健康学部の物理的拠点ができ、学部事務室ができ、新しい教職員が加わり、1期生が入り、学部が誕生しました。そして、駆け足で1年が過ぎました。2年目からは、学部教育、運営のあり方を、より柔軟に、学部教職員それぞれが裁量をもってできるような仕組みに転換しました。未来を築くには、設置準備メンバーだけでなく、すべての教職員、学生に当事者として健康学部を主導していただきたいと思い、節目の1周年シンポジウムの企画も委員会主導に切り替えました。

1周年記念シンポジウムでは、カリキュラム委員会を中心に学部教育のあり方を振り返っていただきました。そして、基調講演には、学部開設前に外部アドバイザーで意見をいただいた黒川清先生や山本拓真社長をお招きし、学生に夢と希望を与えてくださるお話をいただきました。キャリア支援委員会からは学部の学びとキャリアのあり方について示唆をいただけるディスカッションをしていただきました。企業との意見交換会も貴重な機会となったと思います。さらに、当日は参加できない学生も多くいたので、事前にアンケートをしていただいたところ、「未来志向の学生が多い」、「健康な社会の創造に貢献したいという学生が多い」、「健康学部の学びで行動変化が起きたという学生が多い」ことが明らかになりました。これはとても嬉しい結果であり、教職員の皆さんの尽力の賜物だと思っております。

しかし、授業期間中、湘南ではなく高輪キャンパスでの開催ということもあり、シンポジウムの準備から当日の運営まで教職員の皆さんの負担を増やすことになってしまったと反省もしています。学部長の我儘と思われたかもしれませんが、当事者意識を持って教職員が挑戦し続けるために必要な「通過儀礼」のようなものと思っています。1周年記念事業を実施できたということも「奇跡」の一つだと思います。築40年の5号館も大きく生まれ変わりました。ここまでの学部の軌跡の積み重ねが、「奇跡」であり、決して一人ではできないことの連続です。これらからも健康学部にしかできない、ミラクル旋風を！



5号館の教室（改修前）

現在マルチラボ



●健康学部の1年の軌跡

健康学部の開設一年で何が積み上がったのか
：一周年における学びの現状

小林 理

(健康マネジメント学科准教授・教務委員会)

① はじめに

健康学部開設一周年記念シンポジウムでは、健康学部の一年の現状報告と課題の整理を行うことが重要なプログラムの一つであったと考えています。一周年記念という場合は、健康学部が一歳の誕生日を迎えるというお祝いの意味だけでなく、教職員にとって、一年間の教育実践の振り返りと今後の課題の確認の意味があります。日々、教育実践の中に埋没していると、自らの仕事の出発点と、現在の到達点、あるいは仕事の成果を客観的に見ることは容易なことではありません。教職員が、現状と課題の共有認識を確認する機会が必要となります。シンポジウムの当日に向けた準備は、教務委員会だけでなく、各科目群や基幹演習を含めた共通科目に至るまでの各教員と協働して報告内容を詰める作業となりました。ここでは、その一年の成果を取りまとめる作業の概要と、作業を通して理解できたことを整理します。

② カリキュラム実施報告の準備作業

一周年の学びについての報告は、カリキュラム委員会のメンバーをベースに作成することとなりました。教務を担当する立場として、設置準備委員会から、引き継いだ2018年度カリキュラムの実施状況の報告を行うことが重要であると考えていました。報告内容を準備するワーキングのメンバーである、柴田先生、中越先生、遠藤先生とともに、ディスカッションを行い、通常、一年次生向けに行っているガイダンスの内容をベースにして作成する方向を確認しました。教務で開講期に行っているガイダンスの資料に教務委員の岡本先生が作成してきたスライド資料等を組み込みながら、案を作成し、ワーキングメンバーで再度集まって検討を行いました。

検討結果は、予想を大きく覆すものとなりました。当初、教務の立場としては、健康学部健康マネジメント学科のカリキュラムの特徴や学生の学びの仕組みを中心に構成する案を作成していました。ワーキングの議論を通して重要となされた報告のポイントは、1) 学生の学びの生き生きとした様子を伝えること、2) 健康学部のコンセプトを再確認すること、3) 学生の一年の学びでどのような成果が出ているのか、ということでした。教務という立場で、カリキュラムの技術的な側面をいかにわかりやすく伝えるか、ということに、意識が向いていたところから、先生方の議論や助言を受けて、大きな衝撃を受けたことを覚えています。報告内容の組み直しを迫られるという後ろ向きなショックよりは、記念シンポジウムの意義や役割について認識を新たにしたり、という前向きな刺激でした。

③ カリキュラム実施報告の概要

報告内容は、全面的に見直すこととし、写真や動画を入れながら、学生の学びの構造を講義－演習－学外実習というより立体的に整理すること、教員の取組や視点を盛り込むことなどに重点を置くこととなりました。健康学の視点の再確認



は、企画段階からご尽力いただいている石井先生に登壇いただき、生の声としてコンセプトをお話いただくことにしました。柴田先生と二人で、石井先生の研究室へ伺いお願いすると、石井先生は、とてもにこやかに快諾して下さったことを鮮明に記憶しています。その他、フィールドワークの学びの実態をできるだけ鮮明に伝えるために、古城先生がエントリー学生向けに作成されていた動きのあるスライドショーを拝借することを了承いただきました。その後、当日へ向けた準備の中で、報告の時間配分が変更されると、古城先生は、自らスライドショーの長さを再編集して提供くださいました。

報告内容は、まず「1多角的に学ぶ」として、石井先生の健康学概論のコンセプト、基幹科目の積み上げの仕組み等を含めて、健康学の多面的な学びの視点について再確認しました。「2学ぶ力を養う」では、健康学入門演習で、「健康格差」のテキストを中心とする、読むー調べるー議論するーまとめるー書くという基礎学習のプロセスを説明しました。「3学外で学びを広げる」では、フィールドワークA・Bを中心とする、学外実習の学びや多様な課外プロジェクトの実践報告を行い、経験と学習の循環について説明しました。「4健康学部が送り出す人材像」では、遠藤先生・中越先生に作成いただいたインターンシップA・Bの紹介や、人材像のイメージを作るための表彰制度等の取り組みと、柴田先生に整理いただいた、資格取得希望動向アンケートの結果報告を行いました。

フィールドワークや課外プロジェクトの説明資料では、一人ひとりのお名前の列挙は割愛するが、授業や各プロジェクトを担当されている先生方から、学生の活動の様子についての貴重な写真を提供いただきました(別紙報告資料参照)。

以上のように、短い時間の中に、報告は盛り沢山の内容となったが、多くの写真やポイントを絞って作成いただいた各科目からの提供資料により、効率よく報告を行うことができたと考えています。

④ カリキュラムの実施を通して見えてきたこと

あらためて、ここまで報告内容の整理作業を振り返ってみて、この一年間に教職員により、とても多くの活動が行われてきたことに気づきます。カリキュラムの実施の一年でしたが、設置準備の際に詰めきれていなかった授業の実施方法や評価の指標など、開講を前にして、担当教員で、整理して行った事項も多いです。評価の指標や科目間の連携等は、健康学を具体化する仕組みは、今後も引き続き検討が必要です。

カリキュラムは、設置準備の際の健康学部の理想が込められたものですが、実際に運用していくことで、理想に近づいていくものであることがわかりました。具体的には、今回のシンポジウムへ向けた教員間の協働作業を通して、互いに認識を共有することができました。また、教育の成果を取りまとめる際に、学生たちが、健康を多面的に学ぶと言う意識づけが進むとともに、早くからフィールドに出て、知識の活用方法について自問自答しながら学んでいる様子を確認することができました。

●健康学部の1年の軌跡

健康学概論から始まる 健康学部での学び

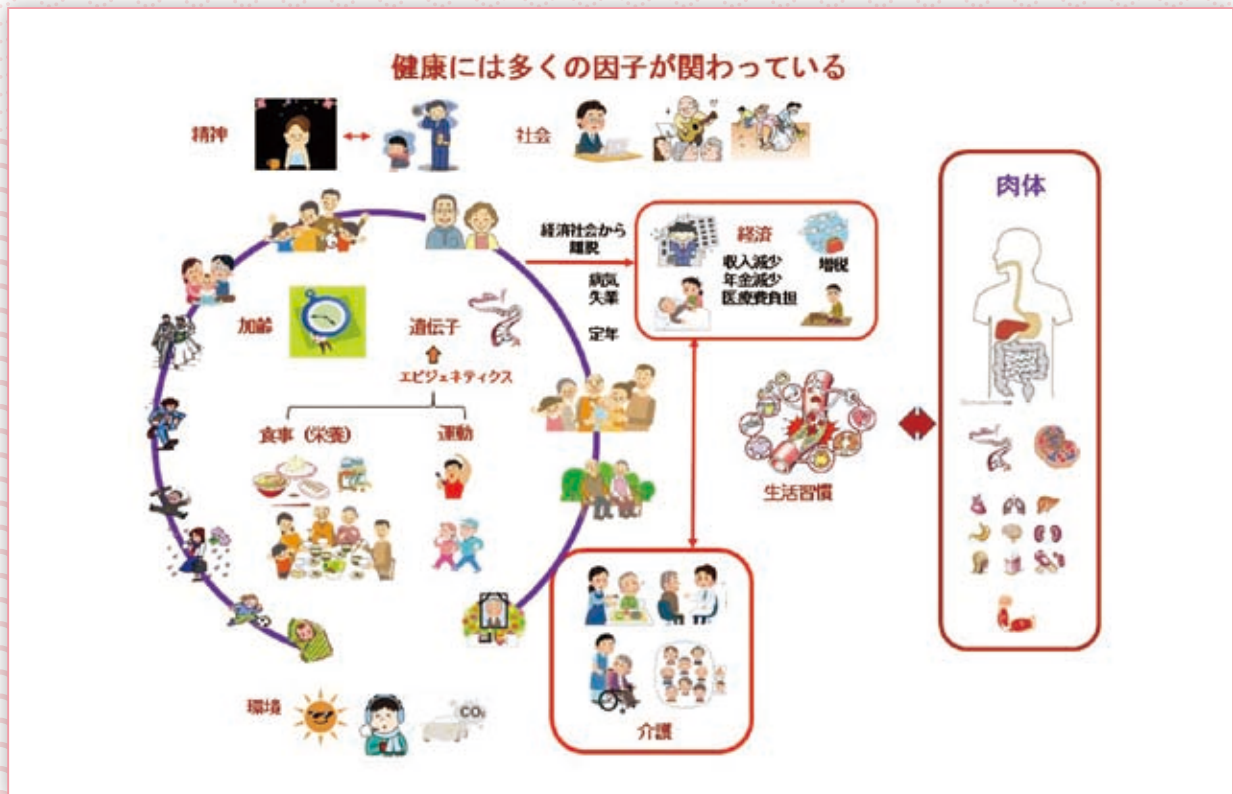


石井直明

(健康マネジメント学科教授・健康学概論科目責任者)

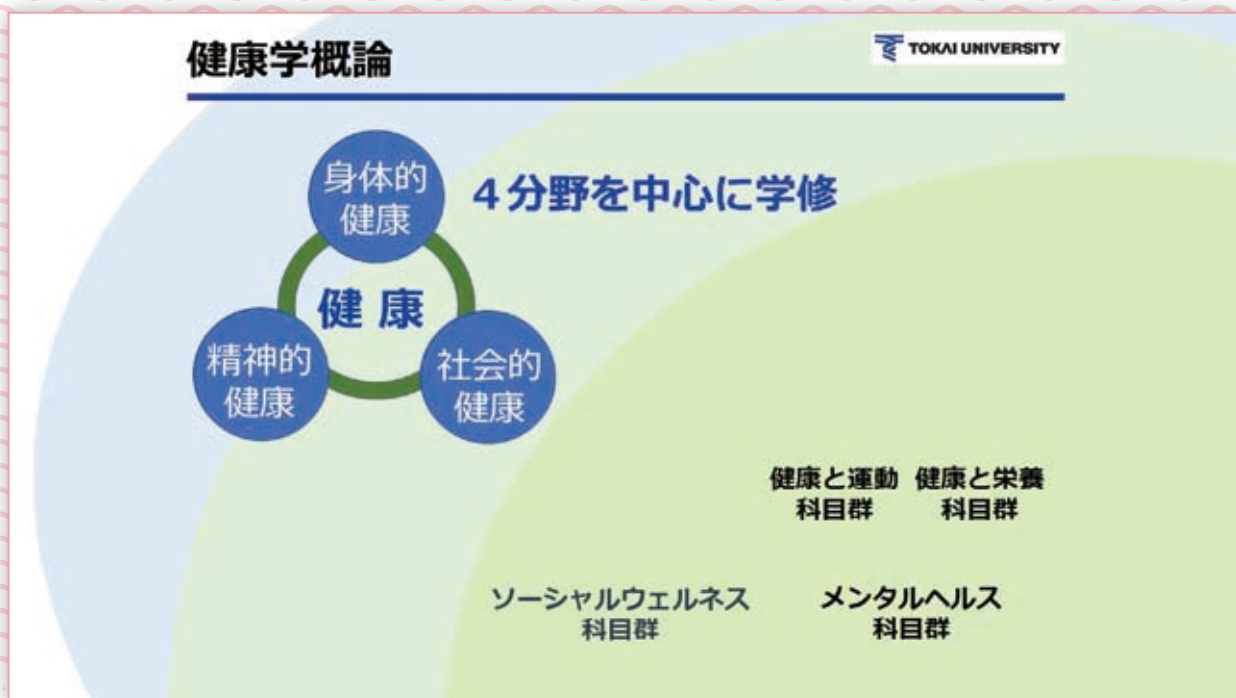
① はじめに

健康度は加齢とともに下がっていきます。栄養と運動が健康に大きく影響しますが、遺伝子の多様性も生まれつきの健康度のレベルに影響すると考えられています。最近では、栄養や運動が遺伝子の発現量に変化をもたらし、健康に影響を与えることもわかってきました。気温や気圧など気候も健康に影響を及ぼしますし、社会生活や経済的な問題も大きな影響を及ぼします。肉体的のみならず、社会的にも経済的にも健康であって、初めて、精神的な健康を得ることができます。このように健康はさまざまな因子により影響されることから、これらの一面だけに焦点を当てても、健康を知ることはできません。



② 進路を決める指針となる「健康学概論」の特徴

健康学部健康マネジメント学科は、「栄養」「運動」「ソーシャル」「メンタル」の4分野を中心に、健康に関わる因子を総合的に学ぶことができる学部として開講しました。入学直後の学生が健康学全体を把握できるようにと設定した科目が、「健康学概論」です。それぞれの分野で、基礎研究をおこなっている教員と実践指導をおこなっている教員が講義をおこなうことで、研究に興味のある学生と実践に興味がある学生のどちらも関心を持てるよう工夫をしています。それぞれの教員が、講義をした分野が健康学のどこに位置しているかを明確にすることで、すべての講義が終わった時点で健康学全体が理解できるようになっています。また、教員に講義の初めに自己紹介をしてもらい、その分野の専門家になった動機を話してもらうことで、学生にその教員や分野に親しみを持ってもらい、将来のゼミの選択や、進路の決定に役立ててもらえるように工夫しています。「健康学概論」を健康学の学びの指針として、低学年では「栄養」「運動」「ソーシャル」「メンタル」の4つの分野を網羅的に学び、高学年ではその中で興味ある分野の科目を中心に履修することで、健康について広く、深く学ぶことができる特色ある学部になっています。



● パネルディスカッション 20代に求めるキャリア形成 —『健康な社会』の実現を目指して



有賀 誠司

(健康マネジメント学科教授・学科長)

健康学部の人材育成

～新時代の健康社会を担うリーダー輩出を目指して～

① はじめに

多くの方々のご支援・ご協力を賜り、学部開設から無事一周年を迎えることができました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

初年度は、学生の前向きな姿勢に支えられ、授業や各種活動において確かな手応えを感じることができました。将来に向けて、社会のニーズと果たすべき役割、変わりゆく健康課題を常に考え、学部学科の特長を活かした教育活動を推進する所存です。

ここでは、学部開設からの現在までの活動を踏まえ、健康学部の人材育成についてお話したいと思います。

② 総合的に裏打ちされたマネジメント力を強みとする人材育成

健康学部の教育目標（ディプロマポリシー：表1）においては、健康について総合的に学ぶことを重視しており、健康に関する単一領域のスペシャリストを育成することを第一義とはしておりません。この観点からは、「ジェネラリストの育成」を標榜しているように思われがちですが、健康学部が目指すのは、健康に関する幅広い知識と技能を現場において適切に運用し、着実に成果を生み出すことができる人材、すなわち、「総合的に裏打ちされたマネジメント力」を有する「スペシャリスト」なのです。

例えば、医療・健康分野の専門家として、医師、看護師、管理栄養士、理学療法士などが挙げられますが、施設・設備や運営システムといった環境が整備されていなければ、専門的能力を十分に発揮することは困難で

表1. 健康学部の教育目標（ディプロマ・ポリシー）

健康学部健康マネジメント学科では、本学の学位授与の方針に従い、以下の能力を備えたと認められる者に学位を授与します。

「知識・理解」

健康の多面的な側面を総合的に捉え、健康社会の創生や健康産業への貢献に必要な実践的能力を有している。

「汎用的技術」

健康に関わる多様な分野の基礎知識・技能を併せ持ち、横断的に分析・活用し、連携協働できるネットワーク力と、サービスを複合的にコーディネートし、マネジメントすることができる。

「態度・志向性」

誰もが自分らしく健康に過ごすことができる、共生的な「健康社会」の実現に向けた取り組みができる。

す。これに対し、健康学部では、特定分野の専門家を育成することを重視するのではなく、専門家を組織化して運用する能力を有するコーディネーター、社会のニーズに応じて新しい商品や事業を創造するマーケットター、ヒト・モノ・カネ・情報といった資源を的確に運用できる企業、病院、健康施設の経営者、地域の特性や課題を多角的に反映し、多くの利益や貢献を産み出す自治体や非営利団体のリーダーなど、将来の健康分野におけるマネジメント人材を育成することを目指しています。

③ 健康関連産業の成長と人材ニーズ

健康分野（医療・福祉）の就業者数は、2012年の706万人から、2030年には944万人へと増加して、製造業、卸売・小売業を抜いてトップとなり、日本経済を左右する重要な産業に成長すると予想されています（総務省統計局労働力調査、2016年度）。また、フィットネスクラブの市場規模は過去最大の4,610億円に到達したことが報告されており（レジャー白書、2018年度）、今後のさらなる成長が見込まれています。

一方、将来の健康課題を想定した新たなビジネスが次々と展開されつつあります。ICTを導入した新時代の健康支援サポートシステム、健康増進や介護予防に役立つ家庭用ロボット、従来の枠にとらわれない新発想のプログラムを展開する運動施設、いつの間にか運動ができてしまう住宅など多岐に渡っています。

健康学部では、新商品や新事業の企画・開発力、市場開拓や事業展開に向けたマーケティング能力等を含む教育活動にも注力し、将来の健康関連産業の成長や人材ニーズにも対応してまいります。

④ 卒業後の進路

健康学部の学生の卒業後の進路としては、以下のような職種や業務を想定しております。

- ① 一般企業：既存の健康関連部署、新たな商品やサービスの企画開発、新規事業開発部署など
- ② 自治体、非営利団体：健康づくり事業、まちづくり事業など
- ③ 運動関連：スポーツクラブ、公共施設、パーソナルトレーナーなど
- ④ 医療・福祉関連：病院、福祉施設など
- ⑤ 研究開発関連：健康食品メーカーの開発部門など

健康学部の学生は、卒業後、上記のような職に就き、社会人としてのスタートを切ることになると思われます。そして、それぞれの職場で社会人としての経験を積んだ後には、学生時代の学修や経験を生かし、健康関連部署に配属されて力を発揮する人、新事業の立ち上げや起業に挑む人が現れてくることでしょう。

既存の職種や職域の枠にとらわれず、大学での健康に関する総合的な学びや、マネジメント力を存分に発揮し、新時代の健康社会のリーダーとして活躍してくれることを願っています。

⑤ むすび

学部開設一周年を経て、完成年度に向けたチャレンジに邁進いたします。教職員が一丸となり、学生とともに成長する姿勢を忘れず、新しい取り組みにも果敢に挑んで参ります。社会に貢献できる卒業生の輩出を目指し、アップデートを重ねながら一歩ずつ着実に前へ進んでいく所存です。

●パネルディスカッション 20代に求めるキャリア形成 —『健康な社会』の実現を目指して



阿部 正昭

(健康マネジメント学科准教授・キャリア支援委員会)

キャリア教育と健康学部が養成する人材

① キャリア教育とは

キャリア教育について文部科学省では、「望ましい職業観、勤労観及び職業に関する知識や技能を身につけさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」と定義しています。

しかし、ここで文部科学省は、キャリア教育の前提となる「望ましい職業観」や「職業とは何か」については何も説明していません。

② 職業選択の視点の転換

そこで、これらの問いに対して、先行研究を踏まえて考えてみると、職業選択論の先駆者であるフランク・パーソンズ(1909)は、『職業の選択』という著書で、キャリア教育で必要な支援は、まず、自己理解の深化であり、次の段階で、職業情報の提供が十分に行われ、そのうえで、進路相談による自己の能力適性と職業情報の合理的結合が重要であると述べています。

また、社会学からの職業の定義としては、デュルケーム(1893)が『社会分業論』で、職業とは社会的分業であるので、まず、自分が生きている社会への理解を深め、社会に存在するニーズを発見することが職業選択の前提となるとして、個人はそこから、社会の要請に応える自己の職業能力を発見・開拓していくことが重要であると述べています。

③ 健康学部の教育目標

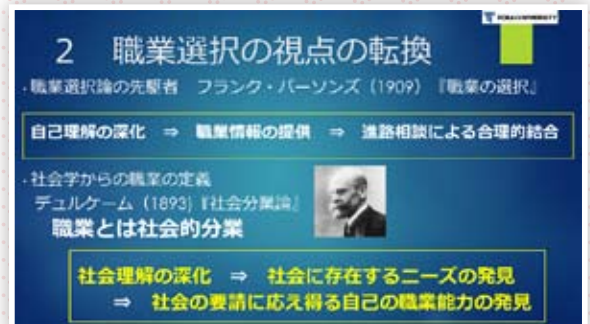
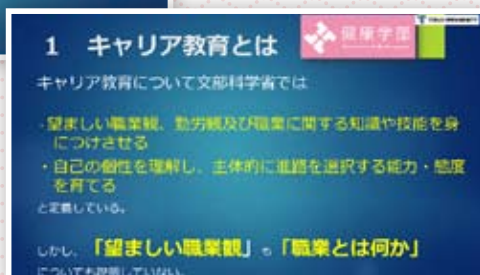
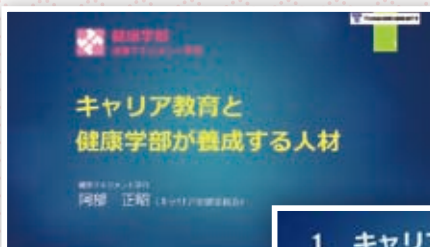
それでは、健康学部では、教育目標をどのように示しているのでしょうか。

健康学部では、「健康社会」の実現を目指し、「健康」を総合的にとらえ、「健康をマネジメント」して、生じている諸問題の解決を目指していくことを目標としています。

また、健康学部では、社会に存在するニーズを発見し、解決の道筋を考察して、他者と協働する力を修得する実習科目として、フィールドワークABCを、企業・機関等の現場での就業体験によって、社会の要請に応え得る自己の職業能力を発見し、修得する実習科目として、インターンシップABをそれぞれ設定しています。

④ 職業とは

では、そもそも職業とは何でしょうか。尾高邦雄(1941)は、職業を社会学的に研究するにあたって、スパンサーの『社会学原理』の第三巻にある「職業制度」および「産業制度」の研究、デュルケームの『社会分業論』、マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を土台にして、職業は「職」と「業」からなる二重



構造を有し、さらに「個性の発揮」、「役割の実現」、そして「生計の維持」の三要素からなっていることを示しました。

職業の3要素については、それぞれ職業の個人的側面、社会的および経済的側面と考えることができる。第1に「個性の発揮」は職業の個人的側面である。これは各個人の信念であり、特別の天分であるところの能力を発揮することです。第2に「役割の実現」は職業の社会的側面である。社会の成員である限り、各人にはそれぞれその役割があり、分担があります。かかる役割あるいは分担が遂行されることによってのみ人間の社会生活は可能となります。第3に「生計の維持」は職業の経済的側面です。人々は一定の勤労の代償として、一定の収入を得る。これによって人々はその生活を営み、その家族を養っていきます。

その上で、尾高は個性の発揮は、役割の実現のためであり、その結果として伴うのが生計の維持であるとしています。そして、これらの3要素の関係が調和的である時、職業はその理想形態を得ることができるとしています。

⑤ 専門職の時代

近代社会は、職業の専門職化が進んでいく側面を持っています。日本語では、ひとつの言葉で表される「専門職」ですが、英語で「専門職」を表す言葉には、①「プロフェッショナル (professional)」: 神の宣託 (profess) を受けて社会的使命を担う者、②「スペシャリスト (specialist)」: 知識や技術の「専門分化 (specialization)」を伴った職業人、③「エキスパート (expert)」: 専門的な知識・技術と職務経験の積み重ねによって洗練 (art) された熟練者、という3つの側面があり、これによって、専門職の特性が示されています。

⑥ まとめ

これらの先行研究を踏まえて、あらためて健康学部が養成する人材を描くと、それは、「健康社会」の実現という社会の要請に応えるプロフェッショナルであり、個性 (固有の職業能力) を持ったスペシャリストであり、人々や社会に貢献するエキスパートとなる人材であるということができるとはならないでしょうか。

参考文献・出典

- ・ Career Integral フランク・パーソンズ <http://careerintegral.net/pukiwiki/parsons/>
- ・ デュルケム著 (1893)/ 田原音和訳 (2017) 『社会分業論』 筑摩書房
- ・ 森村進編訳 (2017) 『ハーバート・スペンサー コレクション』 筑摩書房
- ・ 尾高邦雄 (1995) 『職業社会学』 夢窓庵
- ・ マックス・ウェーバー著 (1920)/ 大塚久雄訳 (1989) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 岩波書店

3 健康学部の教育目標

「健康社会」の実現を目指し、
「健康」を総合的にとらえ、
「健康をマネジメント」して、
生じている諸問題の解決を目指していく。

健康社会の実現に貢献する人材

4 健康学部の学外実習科目

フィールドワークA, B, C

- ・社会に存在するニーズを発見し、解決の道筋を考察して、他者と協働する力を修得する。

インターンシップA, B

- ・企業・機関等の現場での就業体験によって、社会の要請に応え得る自己の職業能力を発見し、修得する。

5 職業とは何か

職業の3要素 (職業性)	専門職の3要素
・個性の発揮	・プロフェッショナル (使命)
・役割の実現	・エキスパート (熟練)
・生計の維持	・スペシャリスト (専門分化)

6 健康学部が養成する人材

「健康社会」の実現という

- ・社会の要請に応えるプロフェッショナル
- ・個性 (固有の職業能力) を持った
スペシャリスト
- ・人々や社会に貢献するエキスパート
となる人材。

第Ⅱ部

2018年度 健康学部研究教育補助金報告書

健康バスによる伊勢原市・秦野市との
協働ヘルスプロモーション

フィールドワーク授業の評価手法の開発

「健康」にかかわる人材の学際性を育てる
カリキュラムの開発と評価

健康バスによる伊勢原市・秦野市との 協働ヘルスプロモーション

柴田健雄、石井直明、安田佳代、阿部正昭、有賀誠司、堀越由紀子

神奈川県伊勢原市および秦野市と東海大学では、バスに測定器を積み込んで公民館に出向いて健康測定会を実施することによって地域住民の健康意識と健診受診率を向上させることを目的として協働でヘルスプロモーションを行っている。2018年度では両市合計で725人の参加者を得ることができた。両市とも特に高齢女性における運動不足による問題が潜在的にあることが明らかになった。

目的

東海大学と神奈川県伊勢原市および秦野市と協働で、健診受診率の向上のため、また地域住民の健康測定を行うためのヘルスプロモーションとして、バスに測定機器を積み込んで公民館などに出向いて健康測定会を実施している。本研究では2018年度のデータを集計し、男女間や健診受診有無間での体組成、骨密度、血圧などの測定値に差があるかどうかを検証することを目的とする。

対象と方法

伊勢原市では年間12回、秦野市では年間5回健康バス測定会を開催し、伊勢原市では市の広報や自治会で参加者を募集し、秦野市では市の広報により事前予約制で参加者を募集した。55名の健康学部1年生がフィールドワークとして両市の健康バス測定会に参加して測定を実施した(図1、2)。

体組成、骨密度(骨梁面積率)、血圧、血管年齢の測定値について、男女別に集計した。また、男女間での有意差検定を行った。男女別に健診受診有無間で各測定値の比較検定には、Mann-Whitney's U検定を用いた。健診受診有無間でのアンケート比較検定には、カイ2乗検定またはFisher直接確率法を用いた。



図1. 骨密度・血管年齢測定(伊勢原市)

結果

伊勢原市の参加者の平均年齢は 71.4 ± 0.4 歳（男性 72.9 ± 0.6 歳、女性 70.6 ± 0.5 歳）だった。2018 年度に測定会に参加した 555 名のうち、健診非受診者は 101 名（18.6%）で、男性では 28 名（16.1%）、女性では 73 名（19.8%）で、男女間で受診率に有意差は見られなかった。測定値について、体内年齢、収縮期血圧、拡張期血圧、血管年齢で性差が認められなかった。健診非受診者は脂肪量が多く、脚点が有意に低かった。男性では有意差のある測定項目はなかったが、女性では健診非受診者は年齢が若く、体脂肪率と脂肪量が高く、脚点が低かった。健診受診有無間でのアンケート比較では、全体と女性で健診非受診者の方が定期的な運動を行っている率が低く、主食・主菜・副菜がそろそろ率が低く、女性だけで健診非受診者は喫煙率が高かった。

秦野市の参加者の平均年齢は 64.8 ± 1.0 歳（男性 72.6 ± 1.3 歳、女性 63.5 ± 1.1 歳）だった。2018 年度に測定会に参加した 170 名のうち、健診非受診者は 21 名（12.4%）で、男性では 1 名（6.3%）、女性では 20 名（18.3%）で、男女間で受診率に有意差は見られなかった。測定値について、骨梁面積率とその判定区分および収縮期血圧のみ性差が認められなかった。男女とも健診受診者と未受診者で有意差のある項目はなかった。健診受診有無間でのアンケート比較では、女性と全体で、健診非受診の方が骨折率が高く、女性では非受診者の方が 1 時間歩行しない率が高く、女性および全体では受診者の方が乳製品摂取率が高く、女性および全体で未受診者の方が海藻小魚摂取率が低かった。

考察

2018 年度は伊勢原市と秦野市の合計で 725 名が健康バス測定会に参加し、122 名の健診非受診者の参加者を得ることができた。秦野市の女性参加者の平均年齢は伊勢原市より低い傾向にあった。伊勢原市では特に女性で定期的な運動を行う率が低く、脂肪量が多く、脚点が低い原因と考えられる。秦野市では測定項目では健診受診有無間で有意差のあるものはなかったが、女性の健診非受診者は歩行が少なく、骨折率が高いことから、運動量が少ない高齢女性の骨密度に問題があることが示唆された。

結語

2018 年度は今までで最大の 725 名の参加者を得ることができた。伊勢原市と秦野市で傾向は違ったものの、両市とも高齢女性の運動不足による問題が潜在的にあることが明らかになった。



図2. 体組成・血圧測定（秦野市）

フィールドワーク授業の評価手法の開発

市川享子、岡本武志、竹内友章

健康学部共通科目「フィールドワークA」は学部のコンセプトとなる、栄養、運動、メンタルヘルス、ソーシャルウェルネス、ソリューションという5つの視点を横断的に捉えるための学びの基礎となる初年次教育プログラムである。本研究では、同授業の到達点を実践と学習から明らかにするとともに、各学生の関与と学習成果を評価するためのルーブリック評価の指標を開発することを目的として進めた。

目的

本研究は健康学部の総合的な特性に応じた特色ある教育・研究のひとつとして実施されたものであり、健康学部共通科目として立ち上げられたフィールドワーク評価手法の開発として進めた。研究初年度である2018年度は、フィールドワークAという科目が健康学部の目指す人物像の育成にどのように寄与するかについて、授業の到達点を実践と学習から明らかにするとともに、各学生の関与と学習成果を評価するための評価の指標を開発することを目的として進めた。

方法

フィールドワーク科目Aの教育目的と目標を生成的に構築する参加型評価ワークショップを7月に学部のFD研修会として実施した。さらに、10月には地域を基盤にした実践的な教育開発の世界的に牽引している、アメリカのポートランド州立大学（PSU）に訪れ、評価の理念とその具体的手法、評価と実践の往還的關係について調査を行った。その上で、PSUの教授たちが執筆した *Assessing service-learning and civic engagement: principles and techniques (campus compact 2018)* を参考にしながら評価指標の作成を進めた。



PSUにて学術を地域社会に生かす Engaged Scholarship に関するワークショップ



Community Based Learning の教授法について Dr.Cress にインタビュー調査

研究の結果

FD活動として実施した参加型ワークショップでは、22人に教員からフィールドワークAの授業が目指す姿とそれを実現するための方法として多数のカードが提示された。高次の目標として、「健康社会の創造」が挙げられ、そのためには教室と地域社会を往還しながら、地域の課題とその解決方法を探る実践と理論の融合が目標の到達のためには重要であること。さらに、こうした目標に近づくためには、問いを見つけるプロセスが重要であり、問題意識の醸成のためには、現場での体験が基盤になるが、そのために科目の目標に関連づけられた丁寧なフィールドの開発が重要であること、深い学びに導くための教授法の開発の必要性などが確認された。

研究の成果

健康学部の理念を反映して、神奈川県内の平塚・秦野・伊勢原・横浜市内の10以上地域パートナーと連携関係のもと、8つのプロジェクトが開発された。

アメリカ・ポートランド州立大学のCenter for Public Service主催の研究会にて、東海大学健康学部フィールドワークの開発過程および教育実践について3名の教員（市川享子、岡本武志、竹内友章）が発表し、さらに“How to enhance Creative Reflection”をテーマに教員1名（市川享子）が発表した。

授業の到達点を実践と学習から明らかにするとともに、各学生の関与と学習成果を評価するためのルーブリック評価の指標を開発し、2019年度の授業から活用されている。

また、龍谷大学で開催されたNPO学会（2019年6月）にて、「コミュニティ・ベースト・ラーニングの多元的評価」をテーマにパネルセッションを市川享子が座長で開催した。

文献

Gelmon, S. B., Holland, B. A., Driscoll, A., Spring, A. and Kerrigan, S. (2018) Assessing service-learning and civic engagement: principles and techniques., campus compact.

市川享子、秋元みどり（2018）「サービス・ラーニングと社会変容のための評価枠組みの構築」、『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』Vol.30、p.43-p.55.



調査の最終日にはワークショップ参加の修了証が授与された

「健康」にかかわる人材の学際性を育てる カリキュラムの開発と評価

堀越由紀子、市川享子、岡本武志、森 真理 他

「健康」をめぐる諸課題は包括的であることから、その教育・研究では異なる専門分野による学際性（Interdisciplinary）が重要である。学際性とは「単一分野では扱えないような複雑な課題」の存在を前提に、課題に関連する専門分野の知見を利用して統合しようとする視座であり方法である。その具体的展開には、課題の複合性に関する認識の共有、各専門分野の知見の提示と統合、多分野協働を可能とする組織風土と仕組みが必要である。学際研究に関するFD活動や、分野交流的なカリキュラム運用を進めることが求められる。

1. 動機と目的

健康学部は、「健康社会」の創造をめざす教育・研究を行う学部として2018年度に創始され、健康課題の総合性を念頭に、「運動」「栄養」「メンタルヘルス」「ソーシャルウェルネス」の各分野、そしてソリューションとして「社会調査」「ソーシャルワーク」からの教員が参集した。それは、健康をめぐる諸課題は複合的であることから、単一分野で扱いきれるものではないとの前提による。

しかし、教員は各自の専門分野の研究スタイルを体得しており、異質な分野との交流は、時として葛藤や負荷につながりかねない。また、教員のそうした状況は学生への教育姿勢に反映するので、学部の運営において、まずは教員が多分野協働的に諸課題にかかわる風土を醸成する必要があった。

そこで、異なる分野が連携・融合しながら何らかのテーマに取り組む方法論として、「学際研究」に着目し、文献の研究と先駆的施設の調査を行うこととした。また、その成果を学部のカリキュラム運営に反映させていくことを企図した。

2. 対象と方法

① 文献研究～「学際」の概念共有

レプコ（Repko, A.F.）らの著書『Interdisciplinary Research, Process and Theory（＝光藤宏行ら訳「学際研究」九州大学出版会）を通読し、学際性についての理解を進めた。

学際性とは多専門性や専門横断性とは異なっている。多専門性（Multidisciplinary）は一度に数個の専門分野の視点からテーマを研究するが知見の統合はしない、専門横断性（Cross disciplinary）は異なる専門分野全てを包含する共通理論に着目して大理論を生み出そうとする。

これに対して、学際性（Interdisciplinary）は、「学際的であるべき必然」すなわち「単一分野では扱えないような複雑な課題があること」を前提として、専門分野の知見を利用して統合する研究を行う。その際、関連する専門分野を包含したプロセスを採用し、特定分野の方法・理論に特権を与えることはない。

また、Research questionの立て方については、特定分野に偏らない記述をする必要があり、エビデンスのある研究を調べ、課題研究に不可欠な学問分野と無理に関係づけなくてもよい学問分野を選び分ける思考プロセスが重要である。

② 先行例の調査

学際研究教育の先行事例の調査をおこなった。

調査日時：2019年2月20日（水）

訪問者：堀越、市川、岡本

調査機関・協力：九州大学人間環境学府

准教授 光藤宏行氏（同大学准教授）



3. 調査結果

九州大沢の状況

- ・ 大学大綱による「学際的視野をもった学生の育成」方針を契機に学際研究コーディネーター室等が整えられた。
- ・ 学府の体制として12のモジュールと6分野から1名ずつ委員を出して「九州大学人間環境学府多分野連携プロジェクト」を形成している（常設委員会）。
- ・ 学際研究サロンに非常勤テクニカルスタッフが勤務し、学際にかかわる事務を担当している。
- ・ 学際教育は「プロジェクトごとの授業」「人間環境学（オムニバス）」「学際研究論（購読）」の3つで、いずれも大学院生が対象である。
- ・ ポイントは、無理のない自律分散プログラムとしての遂行で、教員はまず自分の専門分野があって、それを軸に研究を進め、軸を後回しにすることはしないことである。
- ・ 取り組みの成果により学際に否定的な教員はいなくなった。また、自身の専門は独立したモジュールで守られていることから、パワーゲームのようなこともない。

4. 考察

「健康」は、単一分野では対応しきれない社会課題の代表的なものである。そのマネジメントを教育・研究する当学部においては、「学際」がキーワードである。そこで、「対教員」「対学生」「対組織」の各レベルにおいて、以下のようなことが考えられる。

- ① 対教員：教員が学際的事業であることの価値に気づくよう、各自の専門を主軸としつつも課題によっては、他専門の知見を活用することにメリットを見出し、他専門との協力的な研究が行われる状況の創出。
- ② 対学生：健康にかかわる諸問題は単一分野では解決できないと気づける授業展開。講義科目の共同実施に加えて、フィールドワーク等現場に触れる授業や演習授業において、社会課題に関連する各分野を特定させ、それらの分野では当該課題をどのように説明しているかを精査、照合、比較させることができる。ただし、大学院レベルでの取り組みとして学生の自律性に委ねている九大と異なり、お膳立てが必要であろう。
- ③ 対組織：学際的研究・学際的教育を進展されるためのインセンティブをどのように付与するかが課題となろう。九大でも、学際のための「手間ヒマ」は小さくはなく、それらがシャドウワーク化される懸念があるとのことであつた。その点、学際に関する委員会組織を常設化し、業務として位置づけている点は参考になる。また、必要経費を確保するために学際的な試みに諸費用を優先配分するなどの配慮も引き続き必要となろう。加えて、業績評価への反映として、単一領域における業績積み上げとのバランスを検討する必要がある。

5. 結語

「学際研究」のコンセプトと方法は、健康学部のカリキュラムポリシーに適している。

第Ⅲ部

学生の授業アンケートから選んだ
健康学部の

“いい授業”

① 有賀誠司先生

② 石井直明先生

インタビュアー

菱川 愛

(健康学部教育研究推進委員会)

1

有賀誠司先生

学生の授業アンケートから選んだ 健康学部の“いい授業”



研究熱心

250人という大人数の講義科目を担当されながらも、学生からの高い評価を受けた「健康スポーツ概論」を担当されているのが学科長の有賀先生です。授業の準備をする際に意識している事は、以下の3点だと教えてくれました。

1. 学生が笑顔になる瞬間があるか
2. 「えっ、そうだったのか」と驚く要素を入れる
3. 説明した後に「へえ、なるほど」と言ってもらえるような納得感を引き出す

ただ学生が何で面白くて笑う、あるいは微笑ましくてにっこりするかは自分ではわからない。親父ギャクは絶対にウケない。「えっ、そうなの？」と学生が驚くようなことは教科書には書いてない。そのため有賀先生は24時間365日アンテナを張り巡らし、テレビを見ているも「おもしろい」と思ったらとっさに録画ボタンを押す、あるいは即座にメモしている。

テレビ通販の番組ですら、授業改善の貴重なきっかけとなっていた。ある時、ネットショッピングで有名な社長が出ている番組を何気なく見ていたところ、上手に視聴者を笑わせ、最終的に商品を買ってもらうのにはトークに秘密があるのではないかと思い、録画。よく観察してみた。それだけで終わらずに話し手の間の取り方、声の調子などを完全コピーし、授業で再現した。そうして確かに学生の反応が違うことを確認している。

現在の研究課題は、スマートフォンをいかにうまく授業に活用するか。授業の妨げになる一面ばかりに着目せず、学生が学習に参画するツールとしての効果的な利用方法を考えている。

現在の研究課題は、スマートフォンをいかにうまく授業に活用するか。授業の妨げになる一面ばかりに着目せず、学生が学習に参画するツールとしての効果的な利用方法を考えている。

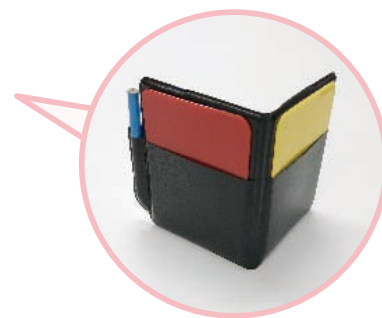
250人いても一人ひとりの学生と

休憩時間から授業の始まりの意識の切り替えができるよう、最初に必ず全員が正しい姿勢で座るようにコーチしている。腰、肩、頭が一直線になる姿勢を保てるよう、教室の中を歩き回り、一人ひとりの姿勢を見て直す。250人いたとしても、これに5分かからないという。

授業の終わりには、学生がミニッツ・ペーパーを提出する。その際、学生の記述欄に目を通し、「良く書けているね」、「ここはもうちょっと書いてほしい」とその場で学生一人一人に声をかける。何度も言うようだが、授業を受けている学生は250人余。行列ができることはあっても20分程度で声掛けは終わるそうだ。瞬時の判断、瞬発力がすごいのは、運動が専門の先生だからだろうか。

運動系と言えば、有賀先生は授業中にサッカーの審判員が用いるカードを使う。スマホを鞆にしまい、授業中は使用しないというルールを説明した上で、違反を見つけた場合、その学生の側まで行き、ポケットか

らさっとイエロー・カードを取り出し、学生に示す。本当にテレビなどで見るサッカー試合の審判員と同じ動きで。当然 250 人の目が、その学生に注がれることになる。レッドカードで退場になった学生は、これまで一人もいない。



◆ 食事も運動もそして授業も腹八分目

「オーバー・ティーチング」という考え方があることを教わった。隅々まで懇切丁寧に説明しすぎるのも良くない。ミニッツ・ペーパーに「もうちょっとここを知りたかった」と、書いてもらえたらちょうどいい塩梅、狙い通りだそう。そして翌週、その期待に応える授業の続きが展開されることになる。もちろん、学生はさまざまなので、ちょうどいい塩梅に合わせるの難しい。

引き算の論理は、パワーポイントのスライドにも応用している。敢えて重要な部分を空欄にしている。教える内容の全部を文字にしていない。すると学生は、自分の手を動かして重点項目を書くことになるという次第だ。また一枚のスライドの説明は、2分を越えないようにする。集中力を欠くことなく説明を聞いている時間は、2分が一つの目安だからだ。お腹いっぱいにならない腹八分が健康にいいのと同じように、授業でも大切なポイントだ。

有賀先生はこうはおっしゃらなかったが、「学生にどのような反応を喚起させると学びにつながるのか」、教員と学生間の交互作用を考え抜いてきつと授業を計画されている。

取材を終えて

早速、有賀先生を真似て穴あきのスライドを作ってみた。授業では、例えば数字を入れる穴あきスライドの場合であれば「50% だと思う人?」「30% だと思う人?」と聞いて挙手してもらい、学生とのインターアクションが増えることが分かった。更に答えが学生の思いの外「70%」だったりすると、「ええ〜っ」と驚きを引き出すことができた。有賀先生、ありがとうございました。

有賀 誠司
先生の



科目名	春学期	秋学期	必選	単位	開講校舎
健康づくり運動の理論とプログラム	金 3	木 3	選択	2	湘南校舎
健康づくり運動の実技と指導A	水 1、水 2	火 3、木 4	選択	1	湘南校舎
健康・スポーツ概論 F	火 4		自己学修科目	2	湘南校舎



「僕は健康がわからない」

「お元気ですか」と聞かれると、生まれた時からの心臓の弁の欠損、大人になってからの免疫力低下によるウィルス感染で左目失明とジェットコースターのように目まぐるしい自身の身体の状態と付き合ってきた石井先生は「はい」と単純に答えられず、「僕は健康がわからないから」とちょっと困った顔をされる。「健康学部」の看板の先生でありながら、逆説的な答えをされる石井先生。但し、ハイタリティのあることは間違いない。アメリカに留学し、世界のトップレベルで競い、見事に世界で初めて神経の発生のメカニズムを明らかにする実験に成功した。

「どんな難しいことも優しく教えないといけない」

帰国し、東海大学医学部の授業やテレビ番組、セミナーの講師として活躍されていた当時は、最先端のことを教えるのであれば「難しい」と学生が思うのは当たり前だと思っていた。

ところがある企業主催のセミナーの予演会（リハーサル）で会の世話人たちから「わからない」と言われてショックを受けた。思い切って同じ会に参加していたパートナー（先生の奥さま）に発表スライドを手直ししてもらったところ、すこぶる評判が良くなったという更に衝撃の出来事が起きた。実は常々、パートナーから「あなたの科学の話は一般の人にはわからない」と指摘されていたのだが…。同じスライドで医学部の授業を試みたところ、やはり「もっと知りたい」という今までと違う学生の反応があった。あれからうん十年…。

「学生の生活感に入っていないと」

石井先生は、教える内容を学生の興味関心にマッチするように工夫している。学生が思わず「えっ？」と前のめりになるような話や自分の話をする。例えば遺伝子のお話をする時には、同じ時に生まれた2頭のチワワのペットの写真を示す。あるいは流行している漫画のキャラクタを比喩として使い、もともとおしゃべり好きな石井先生なので学生のノリに応じてしばしばそこから脇道に逸れる。ライブ感のある授業だ。



「学生が考えないと学問じゃないよね」

例えば「死ぬ10年前の自分の姿を漫画にしてください。」と、学生に求める。このようにして老化への関心を自分のこととして考えられるように授業をリードしている。決して「老化とは何か」のような問いではない。なぜなら学生に遠い世界の話と思われたら、考えるきっかけにならないからだ。

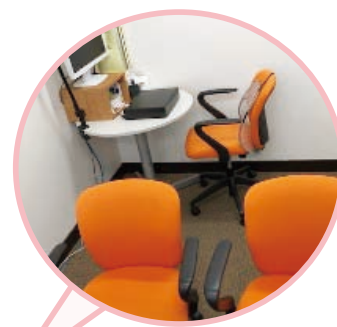
また現代的な課題、問いてあることを非常に大事にしている。例えば「今の時代、サプリメントは悪か?」。これは単なる栄養の話に留まらず、今の時代を生きる人にとって食事に関する問題を意識する問いである。「堀先生(健康学部学部長)のように夜も食べられないぐらい忙しい時代に?」と、学生に問うている。

「ストーリーを大切にしている」

ちょうど小説を読む読者が、前のページに戻って確認しながら読むというよりも読み進んでいって合点がいくような読み方をするのと同じように授業のことも考えている。川の水が上流から下流に流れるよう「起承転結」で授業が淀みなく進む構成を作ることが大事にしている。石井先生の授業には、ストーリーがある。「結」では、その日の授業の重要ポイントが一枚のスライドにしっかりと示されている。

「学生が理解するとは」

学生が理解したと言うことは、教わった内容を一学年下の学生に、あるいは社会人になった時に周りに教えることができることだと言う。他者に説明できると言うことは、習ったことが自分のものになっていないとできない。ただ一年生にすぐそれを求めるのではなく、最終的に四年生でわかる構想を持ち、一年生には本当に基礎的なことを、二年生には二年生にわかる話という具合に学びの深化を長い目で見ている。



取材を終えて

まず研究室に入った時、オレンジ色のすてきな椅子にハッとさせられました。石井先生のラッキー・カラーだそうです。一時間半の間にいろいろなお話を聞かせて頂きましたが、「そんなこと料理学校でも習うよ!何で健康学部で学ぶの?」という問いが、学部開設二年目の教員の私としては一番心に響きました。現代人のリアルな生活の中で起きている問題の解決に役立つ基本知識とは何かを改めて考え、教えられるようになるより良い授業を目指していきたいと思いました。石井先生、ありがとうございました。

石井 直明
先生の



科目名	春学期	秋学期	必選	単位	開講校舎
健康学概論	火3	木1	必修	2	湘南校舎
環境と健康C	水1	/	選択必修	2	湘南校舎
フィールドワークA	セッション科目		選択必修	2	湘南校舎

東海大学 健康学部
教育研究レポート
2019

2020年3月 発行

発行所

東海大学 健康学部

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目 4-1-1

TEL 0463-58-1211